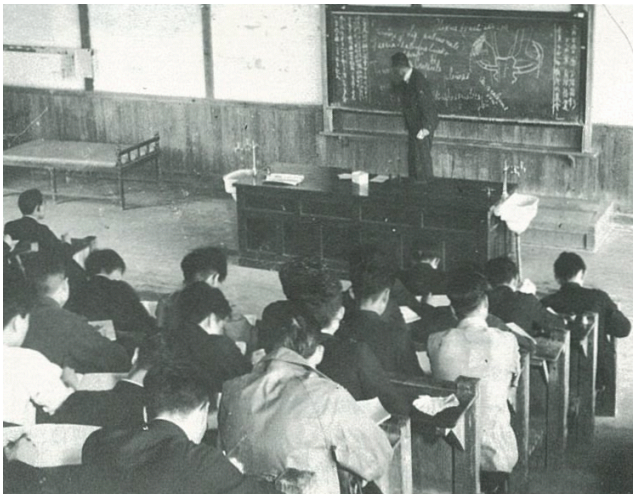
学校生活・学生生活

授業・実験

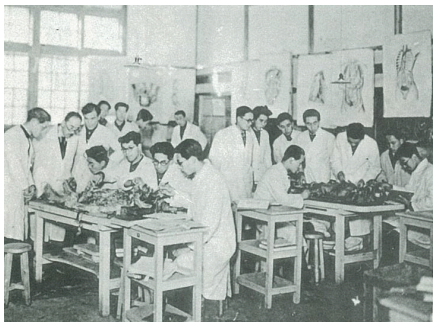


階段教室での講義

創立当初の講義は毎日ドイツ語、医化学、解剖の繰り返しと集中講義の連続であった。また、現役将校による軍事教練も週2時間必須であった。戦時下のため、研究設備はおろか、学習実習器具さえなかった。参考書などは皆無で、学用品、筆記するノートも図書館もなかった。学生は時折、書店の店頭に現れる配給の書物をむさぼり読んだ。そのような中、実験器具として備えられた顕微鏡は当時自慢のもので、空襲があるたびに奉安殿に格納していたという。

昭和20（1945）年7月2日の空襲により、宇部の街は一面の焼野原となった。焼け残った山口医専の校舎には負傷者が収容された。医師は外科の医師1人のみであったため、学生達も、焼け出されて同居していた同仁病院の看護婦に教えられながら治療にあたった。

病理解剖の実習室



解剖実習室

長崎原爆被害調査団派遣　昭和20年9月12日～9月20日

被爆資料を手に冨田校長と家森教授

昭和20年8月9日、長崎に原爆が投下された。広島が壊滅状態のため長崎に行くことのできた大学は九大、熊本医大と山口医専の3校であった。山口医専からは冨田校長以下、教授6名、助教授1名、学生18名が直ちに長崎に赴き救護、調査にあたった。当時の山口医専は解剖刀さえない状態で、出発間際に闇市で包丁を買い求め、唯一の解剖刀として持って行ったという。

寮生活

創立当時の山口医専では市内の旅館や民家などを寮として使用しており、それぞれ学生が分散して生活していた。

第1寮（宇部鍼灸所）

運動会・仮装行列

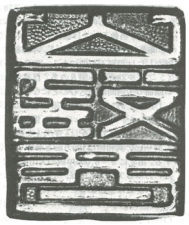
昭和20年4月25日、第1回開学記念として4地区（山口東部、山口西部、広島・関西、九州・関東）対抗で、野球と運動会を行った。

また10月には、終戦直後の沈滞するムードの中、運動会を行った。多くの市民がつめかけ、特に仮装行列はその後宇部市の名物となった。

第1回開学記念運動会の様子

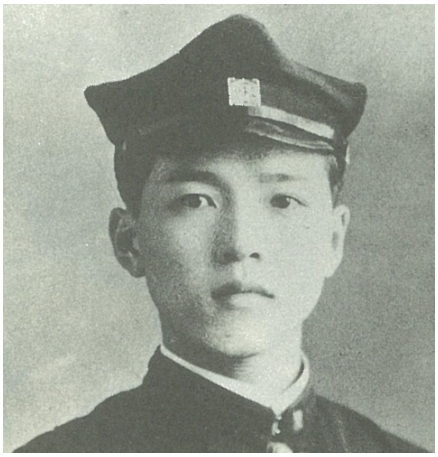
仮装行列

角帽の医専生



創立当時は、戦争中のため衣料もなく、黒の学生服などはあっても古着で、大体の学生が中学時のナッパ服（薄青色の労働服）であった。それでもセルロイド製の校章のついた黒の角帽・白衣だけは開校時に教師たちの苦労によって準備された。

当時、宇部市には官立工業専門学校もあり、そこの学生は丸帽をかぶっていた。それに対して山口医専の学生は角帽であり、一種のトレードマークのようになっていた。校章のデザインは冨田校長、中村、力武、尾曽越教授4名の合作であった。



（左上）**校章**（『霜仁会歴史誌』より）
（上）**当時の医専生**